

自己評価報告書

平成 23 年 3 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520410

研究課題名(和文) 日本語における階層化された対話についての研究：終助詞「ね」「よ」「よね」を中心に

研究課題名(英文) A Study on Configuration Dialogue in Japanese, Focusing on Sentence-Final Particles *ne*, *yo* and *yone*.

研究代表者

中田 一志 (NAKATA HITOSHI)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号：90252741

研究分野：言語学分野

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：日本語学, 終助詞, 発話行為, 対話, 会話

1. 研究計画の概要

本研究は、日本語において、(1)発話を行うときの発話行為の適切性条件(Searle1969)と終助詞「よ」「ね」「よね」の使用が関与する原理を明らかにし(原理の解明)、(2)その原理が話し手と聞き手の相互作用からなる対話やその総体としての会話の構造に拡大し、適用できることを検証し(対話や会話への原理適用の可能性の検証)、(3)対話や会話の構造の中で、聞き手の理解に応じてとられる話し手の手法、別の言い方をすると、これらの終助詞の特定の組み合わせとパターンによって階層的で動的な対話や会話を構成している状況を網羅的に調査する(対話や会話の階層性と動態性の調査)ことを目的としている。

2. 研究の進捗状況

過去3年間の研究の進捗状況は以下の通りである。

2008年度：DVDタイトルの日本語字幕等から資料を作成し、それを活用することによって、上記の研究の目的(1)を達成するための一環として、終助詞「よ」「ね」とSearleの発話行為の適切性条件の関係を解明し、終助詞「よ」は発話行為の事前条件を焦点化し、終助詞「ね」は発話行為の誠実性条件を焦点化するという主張をした。さらに、この主張は、目的(3)を達成するためにも有用であることを部分的に示した。さらにこれらの終助詞に関わる多様な先行研究を発話行為論的な視点で俯瞰することで相関関係がつかめることを主張した。

2009年度：DVDタイトルをもとにした資料作成とその活用によって、目的(1)を達成するための一環として、標準モデル化した「よ

の音調とその解釈を含めて単独の終助詞の焦点化とその解釈をさらに明らかにした。さらに複合形式の「よね」と発話との関係を探るために、先行研究の多様で難解な主張をコミュニケーション行為の方策としての観点から捉えなおし、相関関係を明らかにした。また、目的(2)および目的(3)を達成するための一環として、会話に現れる終助詞「よ」「ね」の特徴的な意味解釈とそのメカニズムについて部分的に紹介した。

2010年度：DVDタイトルをもとにした資料作成とその活用によって、目的(1)を達成するための一環として「よね」文の分類およびその体系性をコミュニケーション行為の観点から試行的に構築した。また、目的(2)および(3)については、状況によって終助詞が帯びるさまざまな意味や解釈を音声情報や文脈情報などを手がかりに特定することが可能であれば、原理の対話や会話への適用可能性を支持でき、かつその階層性や動態性を明らかにすることができる。そこで、当該年度は文脈情報を手がかりに意味解釈を特定する方法を部分的に紹介した。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

複合形式「よね」の発話と意味解釈の原理解明が済めば概ね目的(1)は達成したことになる。2010年度にすでに試行的に「よね」文の分類とその体系性を構築しているため、この点に関して概ね順調に進展していると言える。

また、対話や会話への原理適用の可能性の検証および対話や会話の階層性と動態性を調査することについては、すでに対話や会話

の文脈情報を手がかりとして終助詞の意味解釈の特定ができることを部分的に明らかにしているのので、目的(2)(3)に関しても概ね順調に進展していると言えよう。

4. 今後の研究の推進方策

残り2年間の研究では、これまで同様にDVDタイトルをもとにした資料作成とその活用によって、2010年度から開始した終助詞「よね」文の分類及びその体系性の構築を完成させる。そして、対話や会話の文脈情報を手がかりに終助詞の意味解釈の特定が出来る型を網羅することによって原理適用の可能性を証明する。さらに、会話や対話がどのように階層的に構成されるか、動的な会話や対話がどのように構成されているかを観察することによって、対話や会話を展開する型を分類していく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4件)

①中田一志, 「終助詞ヨとネの意味を予測する」, Conference Handbook of Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7), pp. 70-71, 2011年2月, 査読無

②中田一志, 「コミュニケーション行為としての終助詞ヨネ: 先行研究をめぐって」, 『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』第17号, 13頁~26頁, 2010年3月, 査読有

③中田一志, 「発話行為論から見た終助詞ヨとネ」, 『日本語文法』9巻2号, 19頁~35頁, 2009年9月, 査読有

④中田一志, 「発話行為論的観点による終助詞ヨとネの先行研究」, 『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』第16号, 51頁~62頁, 2009年3月, 査読有

[学会発表] (計 3件)

①中田一志, 「終助詞ヨとネの意味を予測する」, Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7), 2011年3月6日, San Francisco State University

②中田一志, 「日本語の会話の文法: 終助詞ヨとネを中心に」(基調講演), 第2回国際セミナー・日本語教育と日本文化 2010, 2010年2月23日, インドネシア教育大学大学院

③中田一志, 「終助詞ヨ, ネと発話行為の適

切性条件」, 日本語文法学会第9回大会パネルセッション「聞き手の知識」再考—日本語の文末形式の機能をめぐって—, 2008年10月19日, 甲南大学